



Title	大阪癌研究会の歩み
Author(s)	芝, 茂
Citation	癌と人. 1973, 1, p. 2-4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24247
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪癌研究会の歩み

常任理事 芝

茂*

このたび、大阪癌研究会で「癌と人」という小冊子を発刊することになった。

大阪癌研究会の現況を日ごろご援助をいただいている賛助会員の皆さんにいまよりも多く知っていただくのが目的のようである。

そこで、この機会に本研究会設立の経緯をふりかえりながら、これまでの事業の概要を報告し、併せて、将来への希望と願いの一端を記述することにする。

大阪癌研究会が発足したのは昭和39年2月18日で、その歴史は決して古いものではなく、漸く9年を経たにすぎない。しかし、本研究会設立にいたる前に、その前身として、30年にわたる歴史と大きな業績をもった大阪癌治療研究会のあったことは銘記されねばならない。

財団法人大阪癌治療研究会は、さきに大阪の実業家岡惟生氏の寄付金40万円（ラジウム購入資金として指定寄付）を中心とし、これに多くの人々の寄付金を加えたものを基金とし、昭和10年8月31日当時の阪大総長楠本長三郎博士を中心となられて設立されたものである。

設立の目的は、癌その他の悪性腫瘍の病理、治療および予防に関する研究を助成することであり、事業としては悪性腫瘍の研究に関する大阪大学の施設を助成することにあった。

癌治療研究会ではこの目的達成のため、基金の一部をもって昭和11年チェコ・スロバキヤ政府より純ラジウム3.6グラムを購入した。そして、それは大阪大学微生物病研究所の当時の診療部に保管され、主として臨床面に利用、子宮頸癌、舌癌・喉頭癌の治療に用いられた。

ここで、想い出されるのは、癌治療研究会が設立された昭和10年といえば、楠本総長が阪大微生物病研究所の設置を終えられた翌年で、この時、同総長は大阪大学に癌研究所を設置しようとの構想をもっておられたようであり、その

主旨を理解された大阪財界人の手によるこの癌治療研究会の設置も、その構想実現のための一つの布石でもあったようである。

不幸にも、その構想は実現しなかったが、この癌治療研究会が阪大微研の臨床研究部ならびに病院の癌の研究活動に蔭の推進力となり、原動力となったことは動かせない事実であって、微研臨床研究部と病院の発展は癌治療研究会の歴史とともにあったといって過言ではないと思う。

いずれにしても、大阪癌治療研究会が癌の研究と治療の両面において、大阪大学に、とくに微研に、さらには一般社会に寄与した功績は偉大であり、高く評価さるべきものであろう。

時を経て、昭和38年頃、当時大阪成人病センター所長であられた、前阪大総長今村荒男博士は当時の大阪癌治療研究会の発展状況から、その在り方について考えられるところがあったようである。すなわち、本会が単に癌の治療面での研究を助成するに止まることなく、癌全般の研究を援助し、また、大阪大学という一大学の癌研究の施設を助成するということではなく、広く、わが国における癌の研究を推進するという性格のものでなくてはならないということであった。

そこで、今村博士は大阪における多くの癌研究者と語り合われ、大阪財界の方々、またこの方面の研究にとくにご理解のある個人の方々にも賛同を得られて、新しく、財団法人・大阪癌研究会を設立された。その日は最初に述べたように昭和39年2月18日である。

従って、この財団の定款ともいべき「寄付行為」の目的にはそれらの主旨が十分に詮われている。

大阪癌研究会設立後間もなく、私どもは相図り、まず行い得る事業として「癌に関する学術

* 大阪大学微生物病研究所附属病院長

講演の開催」ということに着目し、大阪癌セミナーの開催を企画した。

すなわち、癌に関する基礎的ならびに臨床的研究で、その時々の学会、シンポジウム等で重視され、第1級と評価された研究を全国的な視野で求め、その研究を行った人を招へいし、学会では時間の関係で十分に意の尽し得なかつたところを思う限り講演してもらひ、十分に討議し得るような場をつくることを考えた。大阪科学技術センターを毎月の例会場とし、基礎と臨床の両方から2人の講師を招くことにし、その第1回大阪癌セミナーは昭和40年5月12日に開催された。本会設立の翌年である。

爾来、昭和46年11月16日、第44回の癌セミナーを終るまで、原則として毎月継続して開催した。しかし、この間、種々の事情で行い得ない月もあった。とくに、昭和45年は大学紛争の余波を受けて、とても癌セミナーを開催しておられるような事情ではなかつたのでほとんど行つていなかつた。

いずれにしても、行い得た44回にわたる大阪癌セミナーに招へいした講師の数は96名、参会者は2,367名である。各月例会毎の平均参加者数は54名強で決して多いとは言い得ない。しかし、その時々の演者のテーマにより参会者の顔ぶれが全く変るほどそれぞれの専門分野の同学の士が、単に大阪近郊の研究者ばかりではなく、時には遠方から宿をかけて集まる人もあり、その都度、時を忘れたひたむきな討議が行なわれた。

大阪癌研究会がその事業の一つとして行った大阪癌セミナーはこの点わが国癌の研究にある程度貢献をしたものと思う。

しかし、この大阪癌セミナーは経費やその他の事情から毎月行うことは不可能となつた。止むを得ず、昭和47年度からは一年の春秋に2回開催することにし、春は基礎面の、秋は臨床面の研究会あるいはシンポジウムの形式で開催するというように計画を変更した。

その第1回は臨床研究会とし、昭和47年11月11日、大阪商工会議所において、制癌剤臨床研究会—各科領域におけるトピックス—を主題として行われた。会に参加するもの300名、まことに中味のある研究会を開くことが出来た。

第2回は基礎面のシンポジウムを開くこととし、「発癌」を主題とし、すでにシンポジストも決定、ポスター・案内書・内容抄録もすでに全国の大学、研究所に配布を終了し、開催を待つだけとなっている。期日は、昭和48年5月19日、場所は大阪商工会議所国際ホールである。演者は何れもその道の第1級の人々であるので、成果は期してまつべきものと自負している。

一方、この研究会の事務所のある阪大微研が42年12月千里丘陵に移転したのを契機として、本研究会は吹田・箕面両市において乳癌の集団検診を行うことを企画し、微研附属病院外科ならびに放射線科の協力を得て、昭和43年9月25日以降実施して来た。

今日までの4年半有余の成績はこの冊子の中に中野陽典博士の寄稿があるので省略するが、いわゆる微研方式による集団検診である。

この検診を実施するに当つて、吹田・箕面両市の市衛生部、医師会、保健所、吹田母子会、箕面市保健婦人会の了解を得るために戸別に訪ねたが、何れも心から協力して下さつたこと、また、両市をいくつかの地区に区分し、受検率を高めるために「癌の講演と映画の会」を開催してまわつたこと、いまとなっては楽しい思い出である。

箕面と吹田の両市をえらんだ理由には微研病院が両市を境にする小高い丘の分水域にあって地理的に両市に近く、検診業務に時間的なロスが少ないこと、また、吹田市が商工都市であるのに反し、箕面市が田園住宅都市で両市民の生活環境が相当に違うこと等もあるが、最も大きな理由は、この近い両市で最も適確に摘出し得る乳癌の検診方式をうちたてたいということであった。

集団検診は継続して行ってこそ本当の意味がある。同一人を年に1、2回定期的に検診することが本当の検診であり、初めて治癒可能な時期の早期癌を発見し得るものである。われわれの乳癌検診はそれに十分意を用いた。

両市の乳癌の集団検診を初めて、本年9月で満5年になる。結果は中野論文にある通りであるが、吹田・箕面両市の人を越える人が乳癌の惨禍から免れ得たことは疑う余地のないことである。この検診は未永く継続して行くべきだ

と思う。

さらに、昨年来、大阪癌研究会（微研附属病院外科、放射線科）が中心となり、吹田市、吹田医師会、吹田保健所、吹田母子会、それに日本生命済生会事業団らが相団り、吹田市早期癌対策懇談会を結成した。吹田市における胃癌、子宮癌の検診にも乗り出したのである。佐井寺地区をモデル地区として、きめ細かい胃癌の集団検診が開始されている。

癌の集団検診は労の多い仕事である。しかしそのすべての国民のためにやらねばならない仕事でもある。

今日、癌の研究は世界のどの国でも盛んに行われている。そして、目をみはるような立派な業績が数多く報告されている。しかし、今日の癌の治療に役立ち、明日の癌の臨床に利用出来

るもののは数少ない。すべての成果が日々の治療の中に導入されるまでは道は遠い。

今日、癌を治す唯一の道は早期に発見する以外にはない。集団検診こそその早期発見を可能にするものである。

本研究会が行っている乳癌の集団検診が、さらに社会のために役立つため引続いて地味な努力が重ねられねばならないと思う。

以上が大阪癌研究会設立後これまで行ってきた事業の概要である。

大阪癌研究会がさらに発展を遂げ、それらの事業目的を完遂することを願うものである。そして、希望として、本癌研究会が、世界の粹を集めた研究所と病院をもつことが出来ればと思う。夢のようなことではあるが、これが正夢であることを願いつつ稿を終る。

